

「だろう」と終助詞の共起条件

三枝 令子

要旨

推量の「だろう」への終助詞の承接に関しては共起制限がある。すなわち、終助詞「ぞ」と「わ」は「だろう」に下接しない。これは、「だろう」の持つ「概言性」「おしはかり」の意味合いが、対話者への働きかけを持つ「ぞ」、話し手自身について述べ立てる「わ」の用法と相容れないためと考えられる。「よ」は、対話者に対して、対話者が文の内容を認識すべきだと考えていることを示し、おしはかりの「だろう」とは共起しにくいと考えられるが、用例がないわけではない。その場合、「だろうよ」は、話し手の認識と聞き手の認識とにずれがあることを話し手が意識していることを示すという特別なニュアンスを帯びることが多い。

キーワード：だろう、だろうよ、終助詞

1 はじめに

小稿では、「だろう」に承接する終助詞について考える。法助動詞、あるいは、モダリティ表現と呼ばれる語の中で、「だろう」に関しては、承接する終助詞に共起制限があり、次のように承接する終助詞と承接しない終助詞とがある。

- | | |
|--------------------------------|----------------------------|
| (1) 炭火焼きの魚は、おいしいらしい ね 。 | 炭火焼きの魚は、おいしい だろうね 。 |
| おいしいらしい わ 。 | *おいしい だろうわ 。 |
| おいしいらしい な 。 | おいしい だろうな 。 |
| おいしいらしい よ 。 | おいしい だろうよ 。 |
| おいしいらしい さ 。 | おいしい だろうさ 。 |
| おいしいらしい ぜ 。 | おいしい だろうぜ 。 |
| おいしいらしい ぞ 。 | *おいしい だろうぞ 。 |
| おいしいらしい か 。 | おいしい だろうか 。 |

こうした事実はすでに上野（1972）で指摘されているが、ここでは、この共起制限が何によるのかを考えたい。国立国語研究の KOTONOHA「現代日本語均衡コーパス」検索デモンストレーション版で「だろう・でしょう」と終助詞との共起数を見てみると次の表のようである。表1から、「だろう」と共起する終助詞は「な」がもっとも多く、それに「ね」「よ」「さ」「ぜ」と続く。丁寧体の「でしょう」には、「ね」の承接がもっとも多く、それに「な」「よ」と続くが、それ以外の終助詞は、「でしょう」とは共起しないことがわかる。

表1 「だろう・でしょう」と終助詞の共起数

	ね	な	わ	よ	ぜ	ぞ	さ
だろう	305	741	0	69	10	0	24
でしょう	1862	115	0	42	0	0	0

2 「だろう」の意味

「だろう」の文法的位置づけは長く議論されてきたところだが、最近ではモダリティ表現として「らしい」「かもしれない」「ようだ」「そうだ」などとともその意味の違いが論じられることも多い。また、「だろう」には「確認」とされる用法があることも指摘されて久しい。渡辺(1953)は、「だろう」等の語のふるまいについて、「叙述に通有の詞的素材性を超えきって、終助詞の果たす陳述の次元に迫っている」としている。そこであげられている「どうだ 上手いものだろう」は意味的にも終助詞というにふさわしい。たしかに「だろう」にそうした意味・用法の広がりはあるものの、基本的用法は、林(1960)が述語の陳述部の型としてあげた描叙・判断・表出・伝達のうち、林が指摘するように「だろう」は「判断」の表現と考えられる。三上(1963)は、「だ、する、した」の定言法に対して、「だろう、するだろう、しよう」を概言法と呼ぶ。また、奥田(1985)は、「だ(する)」の「いきりの文」に対して、「だろう(するだろう)」を「おしはかりの文」と呼び、その意味を「経験の中にすでに確認されている事実、あるいはすでに証明されている判断をよりどころに、そこから想像あるいは思考によってあらたにひきだされる出来事をえがきだしている」と規定している。

「だろう」で注目すべき点は、話しことばと書きことばでかなり用法が異なる点である。庵(2008)は、実際の言語データをもとに、話しことばにおける「でしょう」の中心用法が「確認」であること、「でしょう」で言い切る実例は非常に少ないことを指摘している。

「だろう」は「判断」段階の表現だが、そのおしはかる内容は、話し手が知りえないことでなければならない。「明日は晴れるでしょう」では、判断のよりどころはあるに違いないが明示されない。それに対して、「らしい」「ようだ」「そうだ」は、判断の根拠がある推論である。庵(2008)が指摘する「だろう・でしょう」が話しことばでは専門家しか使えないというのは、根拠を示さないで推論を提示できるのは専門家に限られているためだろう。その「明日は晴れるでしょう」も、一方的な聞き手のいない話しことばでは可能だが、予報する人と、たとえばニュースキャスターとのやりとりでは使われない。「だろう」は、会話では「だろうと思う」という形で用いられることが多く、天気予報でも、対話場面では「明日は晴れると思います・晴れるようです」と言うのが普通である。話しことばでは「だろう」はそのままで言い切ることはなく、「と思う」や終助詞が承接される。

日本語学習者が「私は明日持ってくるでしょう」のような表現をすることがある。これは、話しことばにおいては、言い切りの形では「だろう・でしょう」を用いないという点

が教えられていないことに加えて、学習者は、「だろう」を英語の「will」に当たるものとして理解しているためと考えられる。英語の未来形は、「I will come tomorrow.」と話し手自身のことにも使えるが、日本語の「だろう・でしょう」は「おしはかる」意味を持つから、話し手自身の話し手が明らかに知っているはずのことには使えない。

3 「だろう」と終助詞

「だろう」と共起しない終助詞は「ぞ」「わ」である。順にみていく。

3.1 「だろう」と「ぞ・ぜ」

「ぞ」が「だろう」と共起しないのは、「ぞ」が聞き手への働きかけを持つからと考えられる。上野（1972）は、次の例をあげて「だろう」に「ぜ」は承接するが「ぞ」は承接しないことを指摘している。

- (2) あいつは やる**だろうぜ**
*あいつは やる**だろうぞ**

国立国語研究所（1951）は、「ぞ」が対等的に用いられるとき、「対等または目下の相手に對する言い渡し・おどかし・警告などの語気を含む」と述べている。しかし、次の例に見るように、基本的には、「ぞ」はその発話場面において立場が上の者が下の者に用いる終助詞と考えられる。

- (3) 前にも書いたが、あなたが何かをやりたいと思った時が、あなたのチャレンジ適齢期だということを忘れないでほしいものだ。鶴屋南北がかの『四谷怪談』を書いたのは、七十歳になってからです {**ぞ・*ぜ**}。(『女性がカベにぶつかった時読む本』齊藤茂太)
- (4) この最高裁判所の判例が目に入らぬか。質問された方に無礼である {**ぞ・*ぜ**}。(Yahoo! 知恵袋)
- (5) 親分、向こうから変な奴が来ます {***ぞ・ぜ**}。

こうした目下にももの申す語気の強さを持つ「ぞ」は、おしはかりの「だろう」とは両立しないと考えられる。

- (6) おふくろは泣いて喜ぶ {***だろうぞ・だろうぜ**}。

「ぜ」も「ぞ」と同様、さらに承接する終助詞がない点では主張の強さが際だっている終助詞と言えるが、「ぞ」とは違って対等の者同士で使える点で高圧的な表現ではなく、「だ

ろう」との共起が排除されないと考えられる。しかし、話し手自身のことと言及するときには、「ぜ」は、話し手が自身について記憶が不確かであるというような文脈がない限り「だろう」とは共起しない。

(7) 俺はそんなことは言ってない {ぜ・*だろうぜ}。

3.2 「だろう」と「わ」

「ね」「よ」と「わ」を比べてみよう。

(8) a. これ、おいしいね。

b. これ、おいしいよ。

c. これ、おいしいわ。

aの「ね」は、対話者の同意、反応を求めており、bの「よ」では、話し手はことさらに対話者に認識させるべきだと考えていることが示される。しかし、cの「わ」では、対話者への働きかけはなく、話し手はことさらに踏みとどまっている感じが強い。野田(2002)は、「わ」の機能、性質を「基本的に、その文の内容を、話し手自身が、強い感情や驚きを伴って認識したことを表す」と説明している。実際、「ね・よ」は「勧誘」表現に承接し、「よ」は「命令」表現に承接するが、「わ」はいすれとも承接せず、対話者へ働きかけをしない。

(9) いっしょに行こう {よ・ね・*わ}。

(10) すぐ来い {よ・*ね・*わ}。

また、「わ」が承接する述部には、「はずかしい、うれしい、大変だ、驚いた」等の感情を表す形容詞類や、「いい、～と思う、～たい」等、発話者の気持ちを表す表現がよく用いられ、修飾語としては、「きっと」や「全然」といった確信度の高い陳述副詞が用いられる。

(11) 彼の話の聞いていると、いらいらするわ。

(12) きっと成功するわ。

それでは、「これ、おいしい。」と「これ、おいしいわ。」とはどこが違うのだろうか。独話ではなく対話者がいる会話の場合には、「わ」は、女性にとって「よ」の代替表現として機能していると考えられる。「よ」は、対話者の認識を求める終助詞だが、辞書形に「よ」を承接した表現は、遠回しの柔らかいもの言いを求める女性にとっては表現として強すぎる。

- (13) これってコピペだと思うんですが。それにしてもヤフーが不適當だと思えば「勝手に削除」するんだからそれこそこのコピペは「余計なお世話」以外ないですよ。いい加減、うざいから止めて欲しいわ。最近の Amazon マーケットプレイスの値崩れが激しすぎます……。(Yahoo! 知恵袋)
- (14) 妙子って女は悪女です。早く死んでしまえばいいのに。ひさしぶりに思い出して、血圧が上がってしまったわ。あら、ごめんなさい。最近、すぐ話が脱線しますの。(折原一『異人たちの館』)
- (15) 塩見先生、おはようございます。片倉先生、ごぶさたいたしました。先生方と、またお仕事ができるなんてうれしいわ。(井上ひさし『紙屋町さくらホテル』)

上の用例で、「わ」を「よ」にかえると、文の丁寧さのレベルが下がる。特に「よ」が、「のよ」と名詞化した文に承接せず、形容詞類や辞書形に直接承接すると、乱暴な表現となる。終助詞が承接しない叙述、特に「ます形」を使えば主張の強さはやわらぐが、伝達性に欠ける。そこで、「わ」によって自己の認識を強く主張し、そのことによって間接的に、「よ」が志向する対話者の認識を求める表現効果を生じさせていると考えられる。そして、こうした話し手自身の認識を強く主張することと、「だろう」のおしはかり性とは相容れないと考えられる。

「わ」は女性が多く用いるが、これに該当する男性語としては「や」があげられる。

「や」は、勧誘や命令表現に承接する点で「わ」より対者性、伝達性があると言えるが、「わ」と同じく話し手の認識を強く主張する点で「だろう」に承接しないと考えられる。

- (16) 早く行こうや。
- (17) 早くやれや。
- (18) こりやすげえや。
- (19) *お金がかかる**だろう**や。

以上、「だろう」の持つ概言性から、対話者に働きかける終助詞「ぞ」と共起しないこと、また、「だろう」の持つおしはかり性から、話し手の認識を強く主張する終助詞「わ」と共起しないことをみた。

3.3 「だろう」と「よ」

陳(1987)は、終助詞を「話し手と聞き手のあいだの認識のギャップをうめる」ものと考え、「よ」については「話し手がすでに認識し、聞き手がまだ認識していない情報について、話し手が聞き手に対して伝える必要があると判断して伝えるときに使われる」と分析している。たとえば、「財布を落とされましたよ」では、話し手は聞き手の気づいていない

ことを指摘しているわけで、たしかに話し手と聞き手のあいだには認識のギャップがある。しかし、「だろう」は、こうした話し手が確実に知っていることには使えないから、「だろうよ」という結びつきはなさそうに思えるが、使用頻度は高くはないもののその例がないわけではない。ただし、「だろうよ」は特別なニュアンスを帯びることが多い。

(20) A:きのう、よそでごちそうになったんだが、炭火焼きの魚っていうのはうまいね。

B:うまい**だろうよ**。

A:うん、ほんとにうまかった。

Aの知識は話し手自身の体験に基づいている。Bの返事が「うまいだろうね」なら、Aの判断に話し手自身がおしはかりながら同調することが示されるが、「うまいだろうよ」というBの発話は、B自身の推論を主張していることになる。これは、対話者であるAの知らないBの想像する別の世界の存在をあたかも呈示しているようである。(20)は、対話者がことごとを認識しており、話し手のほうが事態を認識していない場合であるが、話し手も対話者も事態を知らない場合においても、同様のニュアンスが生じるように思われる。

(21) A:これ、どこから来たんですかね。

B:さあ、たぶん**タイでしょうよ**。

この例では、話し手も対話者もこれがどこから来たかを知らないが、話し手は、自身の想像を聞き手に主張し、叙述内容に対して突き放した感じがする。

(22) A:これでいいんですよね。

B:たぶん、**そうよ**。

そうですよ。

そうでしょうよ。

Bの発話はいずれも可能だが、「そうでしょうよ」は、喧嘩腰のもの言いととれる。Aが同意確認を求めているのに対して、「そうよ・そうですよ」では、自分の判断を主張しているが、「そうでしょうよ」は、Aの言及している事態とはわざわざ別に、Bが事態を想定しているような、聞き手の考えに寄り添わない突き放したニュアンスがある。

「よ」は様々なモダリティ表現に承接するが、以下の例でみるように、こうしたニュアンスが生じるのは、「だろう」と「って」に限られるようだ。

- (23) 彼は 行くらしいよ。
ようだよ。
そうだよ。
かもしれないよ。
だろうよ。
と(って)よ。

「らしい」から「かもしれない」までは、根拠に基づいて話し手自らが判断し、それを「よ」によって聞き手に知らせている。一方、「だろう」「と(って)」の叙述内容は、話し手の自ら下した判断とは言えない。「よ」は認識のギャップを埋める助詞だから、結局話し手は、自身がよくは知らないことを対話者に知らせることになる。「彼は行くってよ」「彼は行くだろうよ」が期待を込めた発話表現になることもあり得るが、逆に、冷めた投げやりな意味合いを帯びることもある。この後者の場合、「だろうよ」は、話し手の認識と、聞き手、時に第三者の認識とにずれがあることを話し手が意識していることを示すと考えられる。以下、用例を見てみる。

- (24) 「頼まれた？石川ってお旗本には、そんな心当たりでもあるんで？」
「ある**んだろうよ**」宇垣はうるさそうに答えた。(多岐川恭『江戸悪人帖』)
- (25) 「ところで今の気分はどうです？」しばらくして詩郎がそんな質問を隆志にしてきた。無論鉛筆は動かしたままである。「それがいいんだよ」と隆志は答えた。「偶然、といったら失礼だが、さっき君と会ったあたりからさ。そして職安の職員に書類を突っ返されたときからはもっと良くなった」「**偶然でしょうよ、やっぱり**」「偶然かね、やっぱり」と隆志は言った。「こうして芸術家の君に接していることと関係がないかねえ」「**ないでしょうよ**。(川西桂司『薄曇りの肖像』)

用例(24)では、対話者は石川という旗本に心当たりがあることに疑問を持っている。それに対して、話し手が「あるんだろう」と応じれば、単に話し手の推量を示されるわけだが、「だろうよ」によって、話し手は、「あるのだ」という、聞き手とは異なる認識を持っていることを示していると考えられる。(25)においても、話し手である詩郎は、対話者である隆志と異なる認識を持っていることを「だろうよ」によって示していると考えられる。以下の例では、聞き手とのあいだではなく、第三者とのあいだの認識のずれを話し手が意識していることが示されている。

- (26) ところが一時間経ってまた、同じ雑誌社から他の記者が来たのだ。同じ質問をしてから、私が入り出すのを確認して、面会謝絶の札のかかった病室の写真を何枚も

写して帰っていった。気にすることはないさ、といいながらも功は、「倒産して借金かかえている男が、こんな病室で静養していて、どうなってるんですか、とでも書くん**だらうよ**」といている。(木村梢『功、大好き』)

- (27) 笑って聞いていた智子に「まあまあ」となだめられたが、文子のかまわず続けた。「外から見ると優しげなおばあちゃん**でしょうよ**。外ではシャキッとして歩いているものね。でも家の中ではヨロヨロするし、他人には丁寧に笑いながら話して、私には怒鳴りちらして。これはボケの始まりなの？」(古賀麗美『夕風』)

(26)では、話し手と雑誌記者との認識のずれ、(27)では、話し手と世間との認識のずれが示されている。しかし、「だらうよ」には、単に推量の「だらう」に「よ」が承接したと解釈される例もある。

- (28) もう安心だ。梅安さんと小杉さんは、おそらく藤枝をすぎている**だらうよ**。(池波正太郎『梅安蟻地獄』)

- (29) 明け暮れに染翰堂の前を通りながら、どうしていままで思い出せねえでいたんだらうか」「だから、かえって思い出せずにいたのさ。だれだって、見なれたり聞きなれたりすりゃ、それになじんでしまって、なにも感じなくなるじゃないか。それだから染翰堂は頭から消えちまって、あの男と結びつかなかったん**だらうよ**。」(杉本章子『水雷屯』)

- (30) それにしても、とミミの膝に抱かれている赤ん坊を見て、貝塚は呆れた声を出した。「目付きの悪い赤ん坊だな。おめえの兄弟みてえじゃねえか」初めてガキは笑い顔を見せた。「いい目付きじゃねえか。これからなにがあっても、ちゃんと生きてく**だらうよ**」と、その時だった。(吉田 珠姫『旦那さまとウェディングベル』)

先の用例(22)で「そうでしょうよ」が突き放したニュアンスを生じる場合をみたが、同じ述語でも、次のように特別なニュアンスを生じない場合もある。

- (31) でも、わたしは、離婚の決意を固めていますから、いまさら、主人とよりを戻す気持ちには、全然ないんです」「**そうでしょうよ**。あれだけ酷い目に遭わされたんだから…(和久峻三『死闘』)

「だらうよ」が、推量に終助詞「よ」がプラスした意味になるか、特別なニュアンスを帯びるかは文脈による。多くの場合、聞き手に期待があるにもかかわらず、話し手が意図的に逆らう気持ちがあれば「だらうよ・でしょうよ」が突き放した意味を帯びやすい。そして、この特別なニュアンスを帯びる表現は、確認要求の「だらう」に近くなる。

- (32) 「なるほど、君にして見れば、一応もったもな、割合に筋の通った推論だが、それでは被害者に、そんな考えを吹きこんだのは誰なのだ？四次元の世界の存在を信じさせたのは誰なのだ？」 「もちろん、村田保子**だろうよ**。今日の彼女の陳述たるやまるで神がかり的だったじゃないか？（高木彬光『神津恭介の回想』）」

用例(32)の「だろうよ」は、「もちろん、村田保子だろ！」といういわゆる確認要求とされる「だろう」と置き換えることもできる。しかし、「だろうよ」では話し手の認識は呈示されるにとどまっている。

「よ」に近い終助詞に「さ」がある。上野(1972)は「さ」を「当然そう判断されることとして」用いると説明した。中野(1995)は、陳(1987)の「さ」は「話し手が確認、確信していることを、聞き手に対する説明としてのべる文につける」という考察を進め、「さ」が「聞き手がその時関心をむけていることにこたえる内容」にしか承接しないこと、言い換えれば、話し手の「叙述内容を、関心を持って、聞き手の方からも獲得してくれると考えられる」ことを指摘している。そして、「よ」にはこうした制約はなく、話し手のほうから話題を持ち出していくことができるという。次の例に見るように、「だろうよ」は「だろうさ」と言い換えが可能である。

- (33) A: プレイリードッグってなんだ？
B: ドッグというから犬 {**だろうよ・だろうさ**}。
(34) A: この車で行けますよね？
B: 行ける {**だろうよ・だろうさ**}。

しかし、上の例のように、話し手も対話者も事態を知らない場合はもとより、次の例のように話し手は事態を知らず、対話者は知っている場合でも、「だろうさ」は「だろうよ」とは異なり、特別なニュアンスを帯びず、突き放したような意味合いにはあまりならない。「って」に承接する場合も同様のことが言えよう。

- (35) A: 来週には完成しますよ。
B: そう {**だろうよ・だろうさ**}。
(36) 彼は来ない {**ってよ・ってさ**}。

「さ」は、歴史的にも断定の「だ」の代わりをしていた助詞である。現在でも、「さ」だけが「だ」に承接しない。

(37) 春だ {ね・な・わ・よ・ぞ・ぜ・*さ}

このことから、「だろうさ」は単なるおしはかりの呈示を意味し、また、中野(1995)の指摘するように聞き手の関心にこたえるという側面が「さ」にはあるため、「だろうよ」とは異なり、特別なニュアンスを持たないと考えられる。

4 まとめと今後の課題

上野(1972)は終助詞を体系的に論じて、大きく次の二つに分類した。すなわち、「話し手の判断を聞き手に主張するもの」と「話し手の判断を示し、聞き手に最終的な判断をゆだねるもの」とで、前者に属するものを「わ・ぞ・ぜ・さ・よ」、後者に属するものを「ね(な)・ねえ(なあ)」とする。ただし、すでに述べたように、「わ」は、後者に含まれるといってもいいだろう。おしはかりの「だろう」が「ね」や「な」といった「話し手の判断を示し、聞き手に最終的な判断をゆだねる」終助詞と共起するのは自然である。実際、「だろうな」「でしょうね」は、「だろう・でしょう」と終助詞の組み合わせの中で使用頻度がきわめて高い。

一方、「話し手の判断を聞き手に主張する」終助詞と「だろう」とは共起しにくいと考えられるが、「だろう」に承接しないのは「わ・ぞ」だけで、そのほかの「ぜ・さ・よ」とは共起する。すなわち「だろう」と終助詞との共起を考えるに当たっては、「だろう」の概言性、おしはかり性と衝突しない終助詞であればいいということになる。

以上、小稿では「だろう」と終助詞の共起条件について考えてみた。近年、「だろう」の確認用法が注目されているが、終助詞と確認用法の「だろう」のさらなる考察については今後の課題としたい。

用例出典

本文で引用した用例は、国立国語研究所「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』モニター公開データ(2008年度版)」による。

参考文献

- 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞 一用法と実例一』秀英出版
渡辺実(1953)「叙述と陳述—述語文節の構造—」『日本の言語学 第三巻 文法I』(1978)
所収 大修館書店
林四郎(1960)『基本文型の研究』明治図書出版
三上章(1963)『日本語の構文』くろしお出版
上野田鶴子(1972)「終助詞とその周辺」『日本語教育』17号

- 奥田靖雄（1985）「おしはかり（二）」『日本語学』4巻2号
- 陳常好（1987）「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップを埋めるための文接辞—」『日本語学』6巻10号
- 中野伸彦（1995）「終助詞「さ」「な」の働きについて」築島裕博士古稀記念会『国学論集：築島裕博士古稀記念』汲古書院
- 宮島達夫、仁田義雄編（1995）『日本語類義表現の文法（上）単文編』くろしお出版
- 野田春美（2002）「終助詞の機能」宮崎和人、安達太郎、野田春美、高梨信乃『モダリティ』くろしお出版
- 庵功雄（2009）「推量の「でしょう」に関する一考察—日本語教育文法の視点から」『日本語教育』142号

（さえぐさ れいこ 法学研究科教授）